

地理教育への文化的アプローチ —日本の小学校国際理解教育の事例分析—

サルカール アラニ・モハメッド レザ

Abstract

This paper tries to clarify Japanese program of Education for International Understanding (*Kokusairikaikyōiku*) which promote school environment for understanding global situation and other different cultures in practice. Emphasis is placed here on the geography instruction which giving teachers and students the opportunity to teach about the environment, to learn from the environment and to investigate in the environment.

The intention is to examine what happened actually in two lessons of social study (geography instruction) class in *Komeno* elementary school which is representative of a typical municipal elementary school in *Nagoya*. I employed a case study method as the primary methodological approach for data collection.

The article concludes with students' reflections and experiences on program of *Kokusairikaikyōiku* and teachers' reflections on global learning with emphasis on the cultural approach in geography instruction and social study.

(概要)

本論文の目的は、国際理解教育における日本の体験を、地理教育を事例として説明するものである。これに基づき、まず、地理教育の目的との関係における国際理解教育の概念が説明される。その後、環境に対する子どもたちの理解を深め、また国際的な相互理解の拡大と平和的共存のために環境の諸問題を教える方法が、次のような枠組みの中で分析される。1)環境についての学習、2)環境において、あるいは環境から学ぶ、3)環境のための学習。

本論文では、日本の中部地方(名古屋)のある小学校における5年生の社会科学習(地理)の授業を事例に、あるテーマに対する生徒たちの授業参加とテーマへの理解の方法を分析し、地理学習が、日本における国際理解教育の推進に寄与することを明らかにする。

はじめに

ユネスコ憲章の前文に次のように示されている。「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない(Sarkar Arani, 1991)。」この条文は、今日の世界における諸国家、諸文化、諸文明の相互理解の必要性を明確に説明している。言い換えれば、戦争を回避するために必

要な諸文化間の対話は、国家間の問題に限定されるものではなく、われわれ個人の問題なのである。それゆえに、文化間の相互理解を高めるための教育の重要性が認識される。

今日、これまでのどの時代よりも世界の国々とそこに生きる人々の運命は相互に密接な関係を持っており、互いに影響し合っている。さらに近年の急速な情報関連技術の発達により、相互の運命を作用する影響力は、日々増大している。そのために、現代世界においては、一地域の問題が、地域内に限定されることはなく、ただちに世界的な影響力を持つようになっていく。こうした状況ゆえに、われわれは、国際的な相互理解の必要性をより一層理解し、それを推進する責務と負っているのである。

このような状況を踏まえ、ここでは、地理教育は、戦争回避につながるような国際的な相互理解の推進において、どのように貢献することができるのかを考えることにしたい。

地理学習では、子どもたちはまず自分たちが生活している地域の環境とそれに関する問題を知り、様々な状況における人間と環境の関係を、入手した情報に基づいて考える。こうした学習は、自分たちが置かれている状況と世界の他の地域の人々が置かれた状況とを比較し、世界に関するより深い理解を得るための基礎となる(Blij and Muller, 1996)。こうした学習を基礎に、子どもたちは異なった地理的環境におけるさまざまな生活習慣や文化について学び、さらに、そうした違いのうえに成り立っている世界の経済、社会、政治、文化的な構造を学ぶ。

地理学習は、現代世界における文化、社会、経済的なテーマを提示するための基礎であり、国際的な諸問題への理解は、地理学習を通じて習得する基礎的な情報のうえに、深められなければならない。

国際紛争、第三世界の貧困、環境破壊、人口増加といった問題と向き合うためには国際的な協力、十分な知識と建設的な思考を必要としている。大切なことは、世界の人々が互いを知り、困難を解決するために自分が負っている役割を知ることであり、そのためにこそ異なる文化・文明についての理解といえる。

国際理解教育

来日する以前の私は、諸文化に対する知識と理解の必要性について十分に認識していなかった。しかし私は、日本の大学院に入学し、自民族中心の国家から国際社会での共存を目指そうとする日本社会の動きを学ぶなかで、「諸文化に対する知識と理解」という概念を知ったのである。1985-87年における日本の教育課程審議会の報告を調査していた時、次のような一節に出会った。「教育機関は個人の能力の発展、人々の文化や習熟度の発展に必要な機会を作るだけでなく、人間社会とあらゆる領域において人間の能力がのびされることについても考慮しなくてはならず、これらの機会を作り出す下地を人類全てに対しても用意するべく努力しなくてはならない」(NCER-GJ, 1987)。

他の民族の習慣、生活様式、思考方法、価値観などの違いを理解することは、日本人にとって非常に困難である。なぜなら、日本人は基本的に単一民族、すなわち一つの言葉を話す、一つの列島に住む民族であるからで、これ故に、様々な

民族や文化を持つ人々と知り合う経験も、またそうした人々と共に暮らす経験もなかったからである(Takakura and Murata, 1998)。一般に日本人は、他文化の一部は自分達より優れており、他は自分達よりも劣っていると考えている。彼らの一部は他の文化のプラス面に特別な関心を示しており、それらに敬意を払っている。そして一般的に、自分の文化をより高いものと見なしている。その一部はまた、国粋主義にまで至っている(Lincicome, 1993, Takakura and Murata, 1998)。

様々な文化の学習と、それらの違いや類似点、またそれらの起源を比較することは、ある民族の文化をより深く理解する可能性をも作り出すこととなり、より現実的な判断力を手に入れることになる。それゆえに、他民族や他国の人々と、より建設的な方法で共生できるよう、各自が、自分の属する文化についての理解を深めるだけでなく、異文化に関する知識や理解を深めることが重要である。教育は、こうした目標を達成するために必要な基礎を提供しなくてはならない。

日本の教育課程審議会は、1985-87年に発表した報告書の中で、以下の教育項目を日本社会の国際化(国際理解教育)に必要なものとして、提示した(Takakura and Murata, 1998)。

- 国際的な理解のための教育¹⁾
- 平和のための教育²⁾
- 人権教育³⁾
- 諸文化理解のための教育⁴⁾
- 発展のための教育⁵⁾
- 環境教育⁶⁾

国際化推進において教育が担うべきテーマとして、教育課程審議会が提唱しているものは、平和、相互理解と互いの権利に対する敬意を強調するユネスコ憲章の精神に基づいている。そこには、国境を取り払い、文化的な対話と建設的な経済・政治協力を行うこと、自己のアイデンティティを理解すること、国際的な相互理解を推進していくための時代の必要性を理解することなどが含まれている。

日本人は、1960年代の急速な経済成長の影響を、自らの文化、社会、環境といった様々な面で十分に理解をしている(NCER-GJ, 1987)。更に、第三世界が直面している貧困について先進国が無関心ではいられないこと、発展を遂げた国々と、発展しようとしている国々間の社会、文化、経済的な格差を緩和させるために、世界的な取り組みが必要であることを十分に理解している。

教育審議会による問題の提示は、地域、国家、国際的なレベルでの開発計画について考えていくための、建設的な知識と見方や、人権、異なる文化に対する敬意、環境への配慮といったことに対する学習機会を提供してきた。

日本の小学校では、生徒たちが世界各国の生活文化に親しむために資料や教材を展示したコーナーが設けられているところが多い。そこには、各国の国旗や世界地図、様々な国の文化を紹介した資料、ビデオ、書籍などが展示されている。これらのコーナーは、そこを毎日通りかかる子どもたちの関心を惹き付けるような場所に設けられていて、子どもたちはしばしばそこで休憩時間を過ごす。こうしたコーナーでは、アマゾンのジャングルにいる原住民の生活、水不足に対処す

るための外国の取り組み、アフリカの伝染病を、イランの遊牧民の生活などが紹介されている。

地理教育

文化は、その最も一般的な概念において、環境と人間との関係やその利用の方法をも含むものとなっており、地理とは基本的に、そういったことから現れる社会的な関係や思想を学ぶことである。異なる環境と様々な地理的位置が、経済的、政治的、社会的、文化的に異なる体制を形成し、様々な視点や信念を作り出し、文化的に異なる土台、社会的思想、集団や個人の行動を生みだしている (Gregg and Leinhardt, 1994)。

地理教育は、環境に対する理解、人と環境の関係、人間関係に与える環境の影響、あるいは、さまざまな社会や文化の秩序形成に与える環境の影響についての理解を深めることで、生徒たちに文化についての具体的な、そして深い知識を持たせるためにすばらしい基礎をつくる (Ganji, 1999)。さらにそうした基礎は、世界の国々の関係を容易にし、異なる文化、人種、言語、地域の平和的な共生や互いの運命に対する共感を育てるものである。

学校における地理教育は、環境に関する生徒達の地理的関心をかき立て、強めるものとなり、生徒達の住む世界のあらゆる側面に関して知識を得ることを助けるものである。人と環境との関係と、社会、文化、経済的な行動における環境の影響を明らかにするで、歴史、経済、政治、宗教といった他の学問的な議論についての理解が深まるのである (Clark and Smyth, 1990; Egan, 1983)。世界各地における人々の生活や行動と、人類社会的を支配する諸条件について、あらゆる側面から理解することは、異文化への理解を促進するものであり、人権や相互の文化的な信条への敬意を増すものであり (Baker, 1989)、限られた環境における自らと他の人々の決定や選択の効果や影響を、そして恐らく、互いの生活に対する個人的な環境におけるそれを明示するものである (Gregg and Leinhardt, 1994)。

地理教育と環境教育は、異文化理解と国際的な相互理解を推進するための基礎を形作るものだが、日本人が、国際理解教育とそれに関する第六のテーマ—環境教育—の目標との関連において特に関心を示している方法は、1974年に初めてイギリスの学校生活環境教育プロジェクト委員会において、環境教育について提示された方法である (Schools' Council, 1974)。この方法は、以下の三つの領域において、生徒達の関心を高め、積極的な知識の習得を助けるものである (Palmer, 1998)。

1) 環境についての学習

環境についての学習⁷⁾は、地域の特質を見出すための確固とした方法と法則に基づいて研究されてきた。この研究方法の基本的な目標は、知ること (知識や理解の次元) であり、知識を増やし、環境を支配する法則や、各地域に固有の自然と人間の諸特性について考察する。

2)環境において、あるいは環境から学ぶ

環境において、あるいは環境から学ぶ⁸⁾において、環境は学習の基本的な素材として生徒達に紹介される。子どもたちが、研究のために環境を利用することは二つの重要な側面を持っている。第一は、学習方法を学ぶこと⁹⁾であり、生徒達は環境を利用することによって、彼らが教えられるだけでなく、どのように学ぶか(精通の次元)を学ぶという状況におかれる。第二は、生徒達が学習のための素材を、自分たちを取り囲む環境の中から見つけ出し、それを利用することである。言い換えれば、行動するなかで学ぶ、あるいは実践から学ぶ¹⁰⁾のである。子どもたちは数学、国語、理科、美術の時間に、言葉によって学んだものを実践を通じて、感じとり、それから学ぶのである。

3)環境のための学習

環境のための学習¹¹⁾においては、環境に対する親しみや環境への帰属意識を高めることを目指す(関心の次元)。環境に関する情報を示すことによって、子どもたちに環境との対話、環境保護や環境管理の重要性を理解させる。

環境問題に関する学習は、以下に列挙したように、知識と理解、精通、関心といったそれぞれの次元に、重要なテーマが存在している(Palmer, 1998)。

知識と理解(knowledge) :

- 環境の中で発生している自然のプロセス
- 環境に対する人間活動の影響
- 異なる環境と文化、社会、経済の影響
- 環境を利用を監視する国際的、国家的、地域的な法
- 環境に関連する政治的意見形成の方法
- 人間生活と環境との密接な関係
- 戦争、環境破壊、その結果
- 環境と、人類のこれまでの活動や決定が与える影響
- 自然のデザイン、アセスメント、美しさの重要性
- 環境管理の重要性

習熟(skill) :

- 関係について習熟すること
- 量的な習熟
- 問題解決の習熟
- 個人的・社会的な習熟
- 情報の提示と利用の習熟
- 研究と追求の習熟

関心(attitude) :

- 環境と環境に対する監視への関心
- 環境資源とその重要性に対する熟慮

- 環境への敬意と帰属意識
- 人類の生活における環境への関心と価値を認めること
- 環境との理性的な接触

上に挙げたそれぞれの次元で、多くの学習テーマを提示することができる (Harper, 1992)。環境と人との関連において留意することのできる最も重要なテーマは次のようなものである。気候、天然資源、水、鉱物資源、資源とエネルギー、建築、産業、人口と人間の関係、植物と動物等 (NCC, 1990)。

研究対象の事例

ここで筆者は、日本の中部地方、名古屋市立米野小学校の5年生の授業における社会科学習(地理)の授業実践例を取り上げ、教授学習過程における生徒の参加と考察方法の分析をつうじて、日本における国際理解教育の目的を考察したい。

表1と2は、1996年11月13日に行われた社会科(地理)授業の学習活動(全体で二時間、計90分)の全容をしめしたものである。

表 1：社会科(地理)の授業における小学五年生の学習活動、一時間目(45分)

区分	時間(分)	活動内容
1	5	問題の提示。人々を取り巻く地理的環境と人々の生活との間には、密接な関係があることを理解するために比較研究を行うことが大切であることを説明
2	5	イランの地理的状況、人と自然の特徴についてイランからの来客が説明
3	15	イランと日本の生活、地理、環境、文化を比較するために提示された映像、写真、地図、道具類について、生徒に詳細な観察や探求を促す
4	15	イランと日本における人と環境との関係や生活の相違点や類似点の提示と、それらについての討論
5	5	イランと日本の日常生活における相違点と類似点について、授業内容を教師が黒板にまとめる

表 2：社会科(地理)の授業における小学五年生の学習活動、二時間目(45分)

区分	時間(分)	活動内容
1	5	問題の提示、イランと日本の人々の日常生活の相違点の理由
2	7	問題に答えるための生徒達による努力と熟考
3	13	生徒達による答えの提示とそれらに関する討論

4	10	問題に対する答えを教師、イランからの来客、来賓の教師が、それぞれに提示し、それらを相互に比較する
5	5	教師による授業中の討論のまとめ
6	5	授業内容のまとめとそれに対する評価を生徒達がノートにまとめる

一時間目の始めに、石川教諭が授業の基本的なテーマを教室の黒板に書いた。基本的なテーマは、「人々の日常生活の諸状況と地理を強調することによるイランと日本の比較検討」であった。それから彼は、来賓の教諭(東京のある学校の教師)とイラン人の来賓(筆者)の紹介を行った。「私は二時間に渡って行われる今日の授業をどのように紹介しようか大いに考えました。地理の授業、社会科研究、あるいは国際的な相互理解の必要性、つまり「国際化」¹²⁾にしようかと。今日は、イランの地理的な環境と人々の生活状況について好奇心と探求心を持って、日本と同じところや違うところについて考えたいと思います。サルカールアラニさんは名古屋大学の博士課程で勉強していて、持参してくださった資料を使って自分の国を紹介して、皆さんの質問にも答えてくださろうとしています。気を付けてこの方の言うことを聞いて、映画や資料を見てください。そしてイランと日本の同じところや違うところを書いてください。」

石川先生の言葉の後、筆者は、まずイランの自然、そこに生活する人々の特徴、地理的な位置について説明をした。その後生徒たちを五人のグループにわけ、グループごとに、写真、地図、記録映画、手織り絨毯や伝統工芸の見本等の資料を見たてもらい、彼らたちに、イランと日本の、地理的特徴や人々の暮らしを比較し、相違点と類似点をノートするように言った。生徒達は15分の間、それらの資料を注意深く観察した。この間、教諭、来賓の教諭、筆者は、生徒たちの間を周り、彼らの質問に答えた。

石川先生が、多くの生徒が、イランと日本の注目すべき類似と相違をメモしていることを確かめた後、彼らに自分達が検討した結果を発表するよう言った。ほとんどの生徒が、約15分間、積極的に手をあげ、三分の二ほどが自分の考えを発表した。石川先生は、生徒の発表を整理して黒板に書いた。一部の発表は似たものであったため、石川先生は生徒に、できるだけまだ誰も述べていない点を発表するように生徒に促した。ほとんどの生徒が自分の意見を発表した後、石川先生は生徒達に、イランと日本の人々の生活や環境における類似点と相似点に着目しながら、この授業で学んだことについて、自分の考えをまとめるように指示した。生徒達が授業中に発表し、石川先生が黒板に書き留めた類似点と相違点には、次のようなものであった。

類似点：春の花々、高層建築、大きなレストラン、きれいなホテル、大学、銀行、図書館、コココーラ、様々な飲み物、スキー、サッカー、広く長い通り、自動車、遊園地、高い山々の連なる山脈、鉄道や石畳など。

相違点：通貨、衣服(特に女性の衣服)、宗教的行事、労働時間、家の形、食事の作法、食事の種類、部屋の大きさ、学校の広さ、家の大きさ、果物やその種

類(例えば、西瓜、リムー・シーリーニー)、学校が男女別であること、広い平原、キャピール(荒野)、流砂、交通における優先権を守らないことなど。

二時間目の授業の始めに石川先生は、まず一時間目の授業で学んだことを復習し、つづいて、二時間目のテーマについて次のように説明した。「では、一緒に考えてみましょう。皆さんが見つけた、イランと日本の違いが、どうして生まれたものなのかを」石川先生は、この難しい質問にどのように答えたらいいか、グループで話し合ってもらうことにした。

彼は、生徒たちにもういちど自分の質問の意味を説明した後、生徒に約7分の時間を与え、そのなかで、友だちと相談しながらこの問題について考えるように促した。この間、石川先生、来賓の教諭、筆者は生徒達の間を回り、生徒達の質問に答えたり、逆に生徒に質問を投げかけることによって、生徒たちのグループ討論がうまく進行するように指導した。

生徒達の一部が、発表できるだけの答えを準備できたことを確認したのち、石川先生は生徒に問いかけた。「はっきりとした答えが出ましたか？」ほとんどの生徒は、質問が難しいと答えた。その時、石川先生は、答えを見つけた生徒に、質問に対する自分の考えを発表するように求めた。石川先生は、それぞれの生徒が自分の意見を発表した後、生徒全員に、今までの発表に対し、何か意見があれば手をあげるようにといった。

イランと日本の人々の生活がどうして違うかという質問に対して、生徒達が出した答えは、以下のようなものだった。

- イランと日本では人々の思考様式が違う
- 生活様式が違う
- 生活する場所が違う
- イランと日本の人々の生活環境が違い、イランと日本の人々がお互いに離れた環境で生活している

石川先生は、生徒達の意見をまとめながら、次のように言った。「私は、人々の生活における違いは、人々の暮らしている場所の違いから生まれるものではないかと思っています。人間の生活環境は、生活の方法、食べ物の種類などの影響を受けており、そこから各地域に固有の社会的、文化的な慣習が生まれるのです。私はイランを訪れたことがあります。同じイランのなかでも砂漠での生活、カスピ海沿岸の暮らし、山岳地帯での生活は、それぞれに異なっています。砂漠、湖沿い、山岳地帯といった地理的環境の違いが、地域に固有な文化を生みだし、人々の社会的な関係に影響を与えているからです。」

来賓の教諭は、次のように説明した。「人々を取り巻く自然は、人々の生活様式や行動様式に、大きな影響を与えます。皆さん、日本の南の沖縄を北にある北海道と比べてごらんください。家の形、気候、人々の職業、人間関係などに大きな違いがあることがわかるでしょう。皆さんは四年生の地理で、こうした違いについて勉強をしましたね。私は今年初めて沖縄に行き、初めて、その違いの大きさを感じることができました。そこで私は沖縄の大変な暑さと雨を、北海道の大変な寒さや雪と比べていました。そして人々の生活の違いは、自然、気候、人々の住む地域の違いによるものだということがはっきりとわかりました。」

最後に筆者が、人間と環境の相互関係、環境が人間の社会的、文化的な様式に与える影響について、歴史的な観点から指摘した。「私が日本語を勉強し、それを十分に使えるようになった時、日本人がいつも挨拶の後に必ず、「今日はいい天気ですね」、「今日は雨ですね」、「今日は何て暑いんでしょう」などと続けることに気づき、それを面白いことだとおもいました。どうしてか、皆さんにはわかりますか？日本の社会が、戦後、農業社会から工業社会へと変わったのに、どうして今でも人々の会話の中にこのような挨拶が残っているか知っていますか？日本の挨拶について知るためには、日本人のほとんどが農業を行っていた時代にまで遡らなければなりません。当時の日本では、生活の全てが、気候やその移り変わりに結びついていて、気候の突然の変化、雨の量などは、人々の暮らしのなかで最も重要な問題であり、また生不安材料でもあったのです。今、日本人の多くは、その頃とは違う条件の中で生活していますが、挨拶のあとにつづく会話のなかに、そうした日本人の古い暮らしの習慣が残っているのです。更に、歴史的な観点からいえば、こうした違いの根を調べることで、世界の人々の暮らしや文化の移り変わりについて、より深い考察ができるようになるのです。」

最後に石川先生は、授業の要点を手短にまとめたうえで、国際化という日本の新たな目標と、人間と環境の関係という問題について次のように説明した。「異なる環境の中で生き、異なった文化を育ててきた人々が、互いに理解しあうためには、互いのことを知ることが必要です。そのためには、お互いの文化の違いや、生活環境の違いについて充分に関心を払う必要があります。お互いの違いについて学ぶことは、同時に自分のアイデンティティをよりよく理解し、これまで以上に自覚を持つことになるでしょう。こうした知識は、国際的な相互理解、友好、協力を広げるための基礎となります。」

彼は最後に、この授業で学んだことを自分のノートに書き、議論について自分なりの評価をするように生徒達に言った。

おわりに

21世紀を生きる我々の子どもたちは、多様な文化が直接に出会い、相互に接触する世界に生きている。そのなかでは、すばらしい出会いもあるが、衝突や悲劇も発生している。我々は子どもたちに、彼らが生きている世界を知らせなくてはならない。我々は、子どもたちが、現実に存在する国際的な経済的格差、社会問題、文化的な相違から発生する衝突について、理解するための材料を提供しなければならない。生活環境問題と地理教育は、こうした問題について考えるための基礎をを生徒達に提供するための一つの手段である。

地理教育は、人と環境との関係を説明することで、国や地域によって、なぜ行動様式や思考様式が異なるのかを明らかにすることができる。こうした違いを理解することによって、生徒は、どのようにすれば、様々な文化や民族が平和的に共存できるのかについて深く考えることができるようになる。

異文化について具体的に知ることによって、私たちは他者への理解を深め、他者に共感できるようになる。日本社会の「国際化」のプロセスにおいて、あるいはイラ

ンの「文明間の対話」計画のプロセスにおいて、最も大切なものは、忍耐、対話、相互理解である。そのためには、最も必要とされるものは、以下の諸点であろう。

- 生活様式において大きな違いがあろうとも我々は全て人間である。
- 諸文化を深く知り、理解することに対する欲求と、信仰に対する敬意。
- 建設的な対話と、他の文化や文明を学ぶために必要な準備。
- 一国の、地域の問題に関心を持つことに伴い世界的な問題を理解すること。
- 他の人々との接触、特に文化的な事柄における忍耐、親切、寛大。
- 諸国家全てに影響を与えるような国際的な問題に関して積極的な目を持つこと。

謝辞

本論文執筆に際し、学習院女子大学国際文化交流学部の桜井啓子教授と日本大学国際関係学部の植山剛行教授から、貴重な助言を賜った。御礼申し上げたい。

〔注〕

- 1) Education for international understanding
- 2) Education for peace
- 3) Education for human rights
- 4) Education for understanding different culture
- 5) Education for development
- 6) Environmental education
- 7) Education about the environment
- 8) Education in or from the environment
- 9) Learning how to learn
- 10) Learning by doing
- 11) Education for the environment
- 12) Internationalization

参考文献

- Sarkar Arani, Mohammad Reza (1991). *Motale'e-ye Tatbiqi-ye Amuzesh va Parvaresh-e Iran va Zhapon*, [A Comparative Study in the Education of Iran and Japan], Payan-name-ye karshenasi-ye arshad, Daneshgah-e Tarbiyat-e Modarres, Daneshkade-ye 'Olum-e ensani, [Master dissertation, School of Humanities, Tarbiat Modarres University], p.5. (In Persian)
- Ganji, Mohammad Hasan (1999). Akharin bayaniye-ye Anjoman-e Joghrafiyayi-ye Englestan darbare-ye Joghrafiya: April 1999, [The Last Manifesto of England Association of Geography: April 1999], *Roshd-e Amuzesh-e Joghrafiya*, Shomare 52, [Journal of Geography Education, Vol.52], pp.6-9. (In Persian)
- Baker, T.E. (1989). *What is the Capital of the State of Chaos? Geography in the Public School Curriculum*, Paper Presented at the annual meeting of the National Social Science Association, Arlington.
- Blij, H.J. and Muller, P.O. (1996). *Physical Geography of the Global Environment*, New York: John Wiley and Sons, INC.
- Clark, G., Sears, A., and Smyth, J. (1990). *A Proposal to Revise the Elementary Social*

- Studies Curriculum*, Fredericton, New Brunswick: University of New Brunswick.
- Egan, K. (1983). Social Studies and the Erosion of Education, *Curriculum Inquiry*, Vol.13, No.2, pp.195-214.
- Gregg, M. and Leinhardt, G. (1994). Mapping out Geography: An Example of Epistemology and Education, *Review of Educational Research*, Vol.64, No.2, pp.311-361.
- Harper, R.A. (1992). What is Geography's Contribution to General Education, *Journal of Geography*, Vol.91, No.3, pp.124-125.
- Lincicome, M. (1993). Focus on Internationalization of Japanese Education, *Comparative Education Review*, Vol.37, No.2, pp.123-151.
- National Council on Educational Reform Government of Japan (NCER-GJ), (1987). *Forth and Final Report on Educational Reform*, Tokyo: Ministry of Education, Science and Culture, pp.513-514.
- National Curriculum Council (NCC), (1990). *Curriculum Guidance 7: Environmental Education*, New York: NCC.
- Palmer, J.A. (1998). *Environmental Education in the 21st Century*, London, Routledge, pp.131-165.
- Schools' Council (1974). *Project Environment*, Harlow: Longman.
- Takasura, S. and Murata, Y. (1998). *Education in Japan*, Tokyo: Gakken, pp.114-116.